

昔のしつけは

どうだったか



湯 沢 雍 彦

1

一昨年、テルアビブ空港で日本青年岡本公三が乱射事件を起こしたとき、岡本の父はテレビの前に土下座して謝罪した。親に育児責任を問う空気が強かったからである。こうした国際的大事件から、小は電車内の座席取りに至るまで、どうも近ごろの日本人の親の評判はすこぶる悪いようである。子どもに甘すぎてしつけがなっていない、欧米諸国の親に比べてもまことにだらしがない、という非難である。

たしかに、ヨーロッパの親はきびしいといわれる。イギリスでは、五歳の子どもにも相手をたたえるあいさつがでさるようになると同時に、大人の客間には入らないこと、八時には就寝することが強制される。どんなに泣こうがわ

めこうが子ども部屋にカギをかけてしまう。チェコでも、子どもが最初からいい子なのではない。二年間、ブラハの庶民家庭に間借りしていた沼正也教授夫妻から聞いた話では、その夫妻用のうどん粉に砂をまぜてしまったり、夫妻の部屋へ忍んできてパンティーを頭からかぶせたりの連続で、そのいたずらの程度は日本の子ども比ではないという。あまりひどいので、奥さんが母親にいつけるぞという、それだけは勘弁してほしいと哀願すること。おしりをぶつなどというのはごく小さい時のことで、その子は女だが話が母の耳に入るやいなや往復ビンタをくらうのがおきまりだからである。

子どもの弁解など通らないことはドイツでも同じで、小学生ぐらいの子どもが親をひどく恐れて、すぐ両腕を上げてたたかれるのを防ぐ姿勢をとる。自分の子どもだけだ

く、他人の子どもに対しても体罰はごく、当たり前のことで、親のせっかんで殺される子どももかなりあると新聞報道されるくらいである（神品友子『ドイツの家庭について』）

なぜ、そんなにきびしいのか。理由は簡単明りようで、幼い子どもは「何もできない野獣」と同じことだから、厳重に仕込まなくてはならないと考えているからである。それが十五歳を過ぎると、だれとデイトしようが、どんな職業を選ぼうが、親は一言半句もくちばしを入れない。一人前の社会人として親の所属する社会階層に通用するよう、十分仕込んでおいたはずだから。だからこそ十四歳までいきびしくしつけるのだというのだが、その根底には「子どもは野獣」の児童観があるのである。

2

しかし、戦前の日本のしつけもすべていきびしくてよかつたとみるのは、どうも一部の支配階層家庭のみをみた神話的誤解である。大部分を占めていた庶民家族のしつけの实情を、わずかに残されている民俗学や心理学の資料からたぐると、授乳の仕方、離乳時期、排尿排便の訓練など、い

ずれもすこぶるあいまいだったことがわかる。よくいえば、子どもの主体性にゆだねていたといえなくもないが、本当は親の方に考えも計画もない、なりゆきまかせの放任主義だったのである。

添い乳、添い寝が多かったから一人では眠れない子も多く、食事や間食も不規則、清潔の習慣も保健への関心も薄い。歯もみがかず、寝間着にも着替えないといった子が少なくない（牛島義友『農村児童の心理』。昭和十八年の「小国民生活調査報告」は、農家児童の三分の一が歯をみがかず、三分の二が散らかし放題で片づけをせず、間食を好きな時に好きなだけ食べていたことを伝えている）。

どうしてだろうか。戦前の普通の日本家庭では、絶対的な貧困と平均五人の子どものために、父母は仕事に追われ、現実には、祖母や姉が幼児のめんどうをみていたことが、しつけのルーズさを助長していたことは確かだが、数え六〜七歳ぐらいまでは人間ではないのだからきびしくすまい、という幼児観があったことも見のがせない。すなわち柳田国男のいう、「七ッ前は神のうち」で、「神に代わりて来たるもの」（いずれも柳田の論文題名）ゆえ、幼児のするなりにまかせるのがよいという思想である。しかし

七歳を過ぎると、農耕、子守り、手伝いといった労働を中心としたしつけがなされたので、いつまでも甘かったわけではない。七つ前は役立たずだから、放っておいたにすぎないのである。

それに比べれば、最近の自律訓練の方がずっと行きとどいている。農家の方がサラリーマン家庭より遅れがちではあるが、それでも私たちが昭和四十年に調べた調査でも、五二％は二年以内に添寝をしなくなっているし、五七％は四歳までに洗面できるようになっているし、一年以内の離乳が四五％に達していた（家族問題研究会『異なる家族パターンにおけるしつけ』）。都会のサラリーマン家庭では、もっと早く徹底しているから、これらの問題についていえば、戦後の方がはるかにまさっているのが大勢なのである。

3

それなのに、最近のしつけはよくなくて、戦前のしつけが賛美される原因はどこにあるのだろうか。その大きな一つに、戦後日本のしつけがカオスのように混乱し、統一基準がないという問題があることは確かである。一般に、親

はしつけの基準を自分が子ども時代にうけたしつけ体験におくものだが、社会の変動が大きくなればなるほどそのままだでは通用しなくなる。そこで、農村の親にはどう処理してよいかわからぬ混乱が支配し、都市の親は、物わかりがよさそうにみえるが、結局のところ子と妥協する傾向にある。とくに農村の親には、しつけに関して緊張と不安が大きいにもかかわらず、世間一般のしつけに対する批判は少ない。新時代のしつけの「たてまえ」に対して農村の親はどうも弱いらしい。それだけに、小学生に対しては都市よりはるかに放任的であるが、結婚や就職などの具体的な問題が発生する年ごろになると、あわてて子をしめつけはじめるといふ具合に、子の発達段階ごとに大きくしつけの方向がゆれ動くように思われる。

以上のように農村の親も、都市の親も自信を喪失しているが、その結果、親自身の中で「たてまえ」と「ほんね」が分裂し、それが子に反映して子にも二重人格的傾向があらわれる。そしてこの二重人格者同士の親と子の関係が、どこまでがほんんとどこまでが嘘かわからないような、虚虚実々の人間関係を生み出しているといえよう。「子の気持ちかわからない」という親のなげきと、「親の言行は矛

盾している」という子の不満は、いずれもこのあらわれにほかならない。事実、農村でも都市でも約半数の親は自分の方針通りに子を指導することは「不可能」かまたは「不可能ではないが非常にむずかしい」と考えているのである。いずれにしても、将来目標がすこぶる不明確な現代日本においては、親だけを責めるのは酷いというものではなかるうか。

4

これらに対応して正確に比較できる戦前の調査データはほとんどない。それにもかかわらず、大半の人々が戦前のしつけをよいものと信じて疑わないのは、年長・年少者間に支配・服従関係が明確なタテ社会の中に親子関係が重要な一部として位置づけられ、安定した基準をもっていたことと、いま見ることができる戦前の資料としては、修身・国語などの国定教科書か、婦人雑誌のしつけ特集記事ぐらいいしかないためである。前者は、儒教的恭順をあるべき姿として強調したものが現実とはかなり離れていたし、昭和十年代の後者を見返してみると、何よりも「女中のしつけ方」の方が先行しているのに驚かされる。母は女中をし

つけ、女中が子をしつけたのであって、女中を雇えないような家族は初めから問題にしていなかった。要するに、豊かな上層階級の形式的しつけのみしか見やすい物としては残っていないのである。

日本人の親子関係の一般的原型がどうであったかは、明治以前の日本人像を掘り起こすことから出てくると思われるが、大多数を占める一般大衆のしつけの姿は、むしろ長期滞在した外国人の手によってよく描かれている。

明治六年から三十八年まで日本において東京帝大の初代日本語学教授となったチェンバレンは、『日本事物誌』（高梨健吉訳、東洋文庫）の中で、「赤ん坊はとても善良なので、日本を天国にするために、大人を助けているほどである。彼らはゆりかごの時代から行儀がよい。特に少年たちは内気なところがなく、全くのびのびとしている。英国の少年たちは内気なために、一緒にいると、他人にも自分たちにも、ひどく苦悩を与えるのである子どもたちのかわいらしい行儀作法と、子どもたちの元気な遊戯が、日本人の生活の絵のような美しさを大いに増している」

と絶賛している。
ドラマ『勝海舟』の一場面として先刻NHKテレビにも

登場したオランダ人カッテンディーケは、海軍伝習所教官として安政四年から三年間長崎で暮らした人だが、長崎の母親の育児ぶりを次のように描いている。

「一般に親たちは、その幼児を非常に愛撫し、その愛情は身分の高低を問わず、どの家庭生活にもみなぎって」いる。「日本の子どもはおそらく世界じゅうでいちばん厄介な子どもであり、少年は最大の腕白小僧」のだが、同時に「彼らほど愉快な楽しそうな子どもたちはよそでは見られない」。それは「親の子どもの取扱い方によるものと思う」。「自由に遊ばせ、さほど寒くなければ、ほとんど素裸で路上をかけずり回らせる」「子どもらは、かような工合ですぐ発育し、体は丈夫かつ敏捷になる」「他方精神力も……すこぶる健やかに発達していく」。「子どもらがどんなにヤンチャでも、親たちがその子どもをいじめているところなどほとんど見ることができない」というのが、彼の印象であった（水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』）。

さらにさかのぼると宣教師の記録に限られてくるが、一六世紀後半から一七世紀初まで三度来日したローマ・イエズス会司祭のヴァリニャーノは、巡察師として職務から細かい報告を会長宛送っている。ここでも、「子どもたちは

われらの学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子どもたちよりもはるかに容易にかつ短期間にわれらの言葉で読み書きすることを覚える——。子どもの間においてさえ聞き苦しい言葉は口にされないし、われらのもとで見られるように、平手やこぶしでなぐり合って争うということはない」（『日本巡察記』松田毅一他訳）とほめている。

これらの外国人がそれぞれどの階層の日本人親子を観察していたかは問題だが、拘束と放任の中で行儀よさとのびやかさにおいてそれぞれに成功していたことがうかがわれる。これらの時代のしつけに比べて、現代のわれわれは、あまりにも自信をなくし、病理的になりすぎているのではなからうか。八百年も前の『梁塵秘抄（リョウジンヒシヨウ）』の中で歌われている次ののはやり歌の大らかさを、二〇世紀後半のわれわれは改めて味わってみたいものである。

遊びをせんとや生まれけん

たわむれせんとや生まれけん

遊ぶ子どもの声聞けば

わが身さえこそゆるがるれ

（お茶の水女子大学）